

今治歴史散歩

大成 経凡

会報「潮騒」に連載している『今治歴史散歩』。今回（第十一回）から広報誌に掲載します。
 〈第一回〜十回の記事は今治法人会ホームページ<http://www.dokidoki.ne.jp/home2/corpoima>をご覧ください。〉
 今治の歴史を紹介してくださるのは、波方町出身・地域史研究家の大成経凡さんです。

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第十一回は、製塩業を軸に多角事業を展開する波止浜の浜旦那と、そのリーダー的存在・八木亀三郎の業績を紹介し、近代の今治産業界を歴史散歩したいと思います。

第十二回 波止浜財界の巨星・八木亀三郎

●波止浜の商家・升八木のルーツ

江戸時代の天和三（一六八三）年、波止浜に伊予国最初の本格的な入浜塩田が築かれます。海水を堰きとめる干拓工事は、松山藩指揮のもと行われました。藩が期待したのは、塩田と港町からあがる税収入でした。塩田は幕末まで逐次増築を行い、四二軒・約六〇〇畧余りの規模となります。その高品質の塩を求め、全国各地から頻繁に塩買船や釜焚燃料を積んだ船が寄港しました。



波止浜港の石造灯明台
 ※明治35年に、八木亀三郎と矢野通保が現在地へ移築

当時を偲ぶものが、渡し場にある嘉永二（一八四九）年築造の石造灯明台です。「海上安全」「金毘羅大権現」の銘とともに、寄進者の名が刻まれます。その一人・升屋友蔵が八木亀三郎の父で、亀三郎は文久三（一八六三）年に誕生。明治十（一八七七）年に十四歳で家督を継ぎ、当時は一軒の塩田と千石船二隻を所有しました。升屋は同家の屋号で、丹波屋八木家（丹八木）と区別するために「升八木」とも称されました。

●多角事業を展開した浜旦那たち

明治以降、波止浜塩田の増築は行われず、浜旦那と呼ばれる塩田地主たちは多角事業に活路を求めました。例えば、丹八木の八木光三郎は明治初年に醸造業（ヤマタン醤油）を始め、同三五（一九〇二）年には彼を発起人代表とする（株）波止浜船渠（現、（株）

新来島波止浜どっく）が波止浜財界の出資で設立。石垣ドライドックを備えた愛媛最初の本格的洋式造船所の誕生でした。

原真十郎は、社会教育目的の雑誌発行のため、明治四二（一九〇九）年に印刷会社を創業（現、原印刷（株））。地元の塩業組合長も務め、波止浜町長在職中には国鉄波止浜駅の開業（大正一三年）に合わせ、波止浜公園の整備と小島の芸予要塞跡地の払下げを実現。製塩業・造船業の振興に加え、観光産業の振興にも力を入れました。

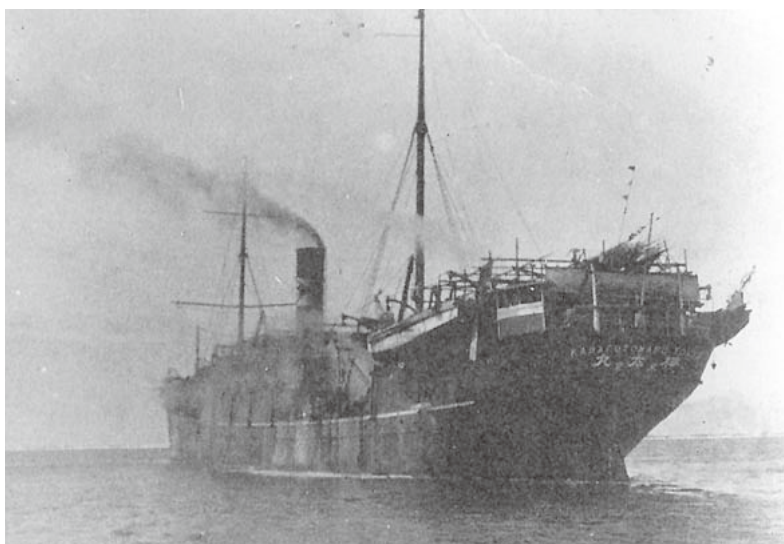
矢野通保（矢野本家）は、波止浜最大の浜旦那で田畑も多く所有し、愛媛有数の資産家でした。また、今治出身の日本画家・大智勝観のパトロンでもありました。明治三八（一九〇五）年に塩専売法が施行されると、製塩業の収益が安定します。浜旦那の資産は、今治の地銀である今治商業銀行を介して、今治綿業界にも融通されました。同三二年に亀三郎が頭取、同三八年に通保が取締役に就任しています。

●北洋漁業開拓への道のり

波止浜の浜旦那で、最もスケールの大きい人物が八木亀三郎でした。彼は、シベリア鉄道の着工（明治二四年）を機にロシア沿海州へと渡り、現地の巨商と日本塩の輸送を特約。さらに、ニコライエフスク（尼港）に日本人で初めて漁区を獲得し、同二六（一八九三）年からサケ・タラの輸入貿易を始めます。同三一年、農商務省の水産諮問会では、塩の海上輸送・販売事業に詳しい有識者として答弁にたち、海外の販路開拓に際し、一部の有力商人に保護金を与える政府の姿勢を批判しています。また、波止浜

村長や愛媛塩同業組合長も務めるなど、愛媛の製塩業界を代表する存在でした。

大正元（一九一二）年に今治瓦斯（株）（現、四国ガス（株））が設立されると、初代社長を務めます。その頃、波止浜に（株）八木本店の店舗・住宅を新築し、同六年当時は愛媛県一の高額納税者でした。同十三（一九二四）年には、わが国の母船式蟹漁業の先駆けとなる大型蟹工船「樺太丸」（二八三・一総トン）を仕立て、業界を驚かせます。これは中古船を舾装したもので、四〇人が作業可能な缶詰工場を内蔵し、当時の水産・造船技術の粋を集めました。同十五年にも蟹工船「美福丸」（二五五・八総トン）を仕立て、



かつて八木本店が所有した蟹工船「樺太丸」
（昭和3年頃撮影／『漁り工る北洋』より）



八木亀三郎家旧宅（波止浜地区本町通り）

この結果、同十三年から昭和二（一九二七）年までの八木本店の蟹缶詰製造量は全国一位でした。

●亀三郎と波止浜財界を襲った悲劇

亀三郎ら波止浜財界にとつての悲劇は、昭和二年に起きた今治商業銀行の休業騒動でした。綿糸相場は多額の不良債権を抱えます。この難局を、頭取の亀三郎ら重役が私財をはたきことで日銀からの特別融資を取り付け、営業再開へと至ります。

しかし、亀三郎の悲劇は続き、同四年に自社が備



今治商業銀行の休業を告げる
海南新聞（昭和2年1月25日）

船した送込船「豊国丸」（二三三・四総トン）が襟裳岬沖で沈没し、多数の死者をだします。やがて蟹工船業界で企業合同が進むなか、後継者の子息・實通を同九年に亡くし、朝鮮の金鉉開発をやりかけたところで本人も同十三（一九三八）年に亡くなり、東京青山霊園に葬られました。